

第445回千葉医学会例会 第2回佐藤外科例会

(昭和41年12月17, 18日 千葉大学医学部附属病院屋階大講堂において)

1. 胃幽門部排出機能に関する知見補遺

広田和俊(千大二外)

田中文隆(インターン)

胃内容物の機能的排出障害を軽減するため、その原因の一部は幽門洞部の過緊張によるとの考えから、リドカインにより、それを抑制しようと考え実験を試みた。すなわち4%リドカイン8mlを幽門部(人)に塗布した後、造影剤200mlを服用させ右側臥位をとらせた。その後時間を追って造影剤の排出状態をX線上で観察した。結果は7例すべてにおいて、リドカイン操作により、造影剤胃内残留量の減少を見、排出時間の短縮を見た。この結果より、幽門洞部の緊張はリドカインにより取り除かれたと考えられる。この事実より胃内容物の排出機序に関して、幽門部粘膜における圧知覚のreceptorの存在と幽門輪部を含む幽門洞部の重大な意義が推論される。またProximalの胃切除後の機能的排出障害ならびに類似の排出障害にリドカイン適応の臨床的意義があると考えられる。

2. 消化管手術におけるアミノ酸輸液の経時的利用変化とイノミン酸添加効果

守田博之, 平沢与枝子(インターン)

広田和俊(千大二外)

最近消化器外科の分野で、総合アミノ酸輸液の利用度が高まって来ているが、われわれは手術直後においても点滴静注した総合アミノ酸輸液が体内にとどまり、よく利用されるかどうかを検討した。試験方法としては術後の患者にアミノ酸を点滴静注し、そのアミノ酸が α アミノ窒素として尿中にどれくらい排泄されるかをみてその利用率を推定した。その結果術直後においても総合アミノ酸輸液の90%は体内にとどまり充分実用的効果を呈した。

また実験的分野から蛋白合成を促進すると最近2年間に報告されているイノシンのアミノ酸合成作用に関心を抱き、イノシンを添加したアミノ酸輸液の利用率がイノシン非添加時のそれと比較してどう変化するかを観察した。8症例に延べ77日間の試験を行なった結果8症例中

6例において、イノシン添加総合アミノ酸輸液が、非添加時に比較して、尿中アミノ窒素の排泄量を抑制する傾向がうかがわれた。

3. 乳腺結核症の2例

柏原英彦, 松浦成(インターン)

中野喜久男(千大二外)

乳腺結核症は1829年Astley Cooperの最初の報告以来欧米において1953年まで535例、本邦では1892年三宅の報告以来181例に達している。最近当教室において2例の乳腺結核症を経験したので報告する。第1例。40才女。20年前右肺結核症に罹患した。1月前右乳腺外上方に小指頭大、無痛性腫瘍に気付いた。腋窩リンパ節を触知せず、血沈値は30分5, 1時間11で腫瘍剔出術施行。組織検査で結核と診断、INAHを使用し経過順調である。第2例。28才女。9月前右乳腺外上方の無痛性腫瘍に気付き腫瘍剔出術施行。大きさ3×4cm, 血沈値は30分14, 1時間30であり、組織検査で結核菌陽性で結核と診断し、化学療法を行ない経過順調である。乳腺結核症の頻度は欧米、本邦ともに平均0.86%で、大多数は女性の性的活動期に発症する。無痛性腫瘍と腋窩リンパ節腫脹のため乳癌と誤診され根治手術を受けた報告も多いので、早期に試験切除による組織検査を行ない、適切な治療を施すことが大切である。

4. 橋本氏病の一治験例について

田所潔(研究生1年)

1912年に橋本が特異な組織像を示すStruma lymphomatosaの4例を初めて報告して以来まれな疾患とされていたが、1956年にRoittらにより甲状腺自己抗体が証明されてから大いに関心をもちた。Woolnerらにより橋本病の定義も広められ、現在ではその数も急激に増して来ている。当教室では橋本病と診断されたものは過去に2例しかなく、その1例を最近経験したので、統計、病因、自己免疫などに関し文献的考察を加えて報告した。症例は49才の女子で瀰漫性の甲状腺腫と軽度の圧迫症状を訴え、検査の結果血沈値が高度に促進、 γ -Globulinの異常増加、A/Gの低下などがみられ諸家の